

電子情報通信技術と 日本の自然

編集長 酒井善則



会誌の表紙デザインを決めることも編集長の仕事の一つです。昨年は森、今年は水を題材と致しました。いずれも地球、自然をイメージしたもので、私たちが祖先から受け継いだ環境を守る電子情報通信技術を表現したかったからです。編集長に再選された場合、来年は長い間かかって自然と人間が調和してできた田園と里山を、次の年には電子情報通信と自然との調和をイメージできる表紙ができないかと考えています。

私は月1回くらい週末を山梨県北杜市で過ごします。八ヶ岳山麓で美しい自然のある場所です。近くには両親の眠る墓があります。子供のころ昆虫を追い回した野山、中学・高校時代に何度も登った八ヶ岳、更には高校3年生の夏休み1か月受験勉強を行った場所、皆すぐ近くです。東京の自宅で過ごしているときに比べ、北杜市に滞在しているときは脈拍も低くなっています。北杜市で過ごす時間を長くした方が健康上は良さそうです。ただ最近でも1週間連続滞在することはほとんどありません。その一番の原因は、北杜市の家ではブロードバンド環境が不十分なことです。経費節減のため固定回線は敷設してなく、携帯は使えますが、私の3G無線高速アクセス用PCカードでは安定した接続ができません。光ファイバ回線で情報にアクセスできる職場、東京の家とは大きく違います。高校3年生のころ1か月間受験勉強をしても何も不自由がなかった場所で、仕事が1週間もできないというのは何か不思議な思いがします。原稿等の執筆、講義の準備、研究論文のサーベイ、以前はすべて出版物に頼っていました。最近は多くの情報はネットワーク頼みです。このためブロードバンド環境のない場所は仕事のできない場所です。またインターネットのメールを携帯に転送していないこともあり、帰京後にたまっている膨大なメールの処理をするのも憂鬱な仕事となってしまいます。

総務省でユニバーサルサービス制度に関する仕事をしています。現在ではほぼ日本全国均一な低料金で固定電話の接続が可能となるよう、全通信事業者が費用を公平に負担しようとするものです。実際の制度作りになると、各通信事業者の負担額をどのように算定するのが論点になることが多いのですが、我が国は最低限どこまでの通信環境を全国民に提供すべきかという根本的な議論が重要になります。多くの人々にとって固定電話はもはや必要最小限の通信手段ではないかもしれません。ユニバーサルサービスの対象をどうするのかは今後の課題になっています。すべての日本人がどこに住んでも低料金でブロードバンドアクセスができ、情報収集を可能とすることは重要だと思います。CO₂削減の手段となる在宅勤務、電子政府等すべてがブロードバンド環境の整備により進展します。しかし反面、情報に追われない生活ができる場所がますます少なくなっていくことが本当によいのかどうか、疑問に思うこともあります。ブロードバンド環境の整備された北杜市の家では、私の脈拍も東京と同じになるのかもしれません。

昔モンゴル高原の遊牧民族は、農耕民族に対して大地を傷つける人々と考えて敵がい心を持ったといわれております。北杜市の田園、里山も大地に傷をつけた結果かもしれません。私の目からみると、見事に八ヶ岳の自然と調和して、一つの美しい風景になっております。情報システムの整備された地域も田園、里山に調和して、そこに暮らす人々が豊かに生活する新しい風景となる可能性があると思います。人間が生活するための仕事の環境、かつ自然を損なわずにストレスも小さい生活を確保することが、電子情報通信システムの最大の目標ではないかと考えております。